

Title	老水夫の〈祈り〉と〈喜び〉
Author(s)	藺村, 喜次
Citation	Osaka Literary Review. 14 P.27-P.39
Issue Date	1975-12-15
Text Version	publisher
URL	https://doi.org/10.18910/25669
DOI	10.18910/25669
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

老水夫の〈祈り〉と〈喜び〉

藪 村 喜 次

コールリッジの有名な三つの詩「老水夫の歌」、「クリスタベル」そして「クブラカーン」の中では「老水夫の歌」がこれまでに一番多くとりあげられ、論じられてきた。あるいはこの詩をだしにしてさまざまな批評理論が例証されてきた。J. L. Lowesの *The Road to Xanadu* (1927) が「老水夫の歌」と「クブラカーン」の中にあらわれるイメージや語句の起源をさぐり出して以来、Maud Bodkin がこの「老水夫の歌」にユング心理学を応用し死から再生へ至る原型パターンを見いだしたのに対し、新批評の立場から R. P. Warren がこの詩をコールリッジの詩的想像力の信念を象徴的に述べたものだと考えた。あるいは G. Wilson Knight や Kenneth Burke 等は既にこの詩に象徴的な読み方を与えていた。これらの原型批評あるいは象徴的解釈はコールリッジ自身の意図に注意を払うというよりはむしろ彼が気がつかなかったような意図を明らかにすることに、より力をそそいだように思われる。もちろんこのような批評方法には反論が予期されるのであり、彼ら新批評家達はコールリッジの批評原理についての考えを無視しているという非難が E. E. Stoll によってなされたし、その後 Elder Olson からも同様の反論がなされた。あるいはまた社会的、歴史的な面から老水夫を精神的冒険者とみる E. M. W. Tillyard などがいた。

このようなさまざまな批評理論、解釈の中でははっきりとさせておかなければならないことは、まずコールリッジが「老水夫の歌」の中で意図した意味をさぐるものが批評の第一の仕事であって、彼が気づかなかった（と思われる）意図は第一の過程を終えた後で考えねばならないということ

老水夫の〈祈り〉と〈喜び〉

ある。従ってこの立場にたつと、たとえばアホウ鳥をコールリッジの妻 Sara と同一視したり (K. Burke, *The Philosophy of Literary Form*, University of California Press, 1973, P. 72)、コールリッジの創作上の想像力とみる考え (George Whalley, "The Mariner and the Albatross" in *Twentieth Century Interpretations of The Rime of the Ancient Mariner*, ed. J. D. Boulger, Prentice-Hall, 1969, P. 85) はあまりにも恣意的で、コールリッジが「老水夫の歌」の成立事情について解説しているのにもかかわらず、それを無視しているという点で少くとも私には不十分なものと言わねばならない。

この小論では「老水夫の歌」をこれまでにコールリッジが書いてきた詩の延長に据え、〈祈り〉と〈喜び〉という鍵となる語を通して老水夫の救済の過程を明らかにし、あわせてこの詩のねらいがどこにあったかを考察したい。

この詩の成立状況については『文学評伝』第14章でははっきりと述べられているのでよく知られているが、この解説はコールリッジが「老水夫の歌」を発表してから15年以上もたっているので、まずこの詩が書かれた頃のコールリッジの考えを知ることが大切であることは言うまでもない。

1797年2月5日付けの手紙で C. Lamb は「君が町にいた時に、長編の詩に最も実りの多い題材として悪の起源を話していたことをぼんやりと記憶している。どうしてそれをを用いないのかコールリッジ君、想像力を働かせる余地があるだろうに。」(1)と述べ、コールリッジにこの種の詩作を勧めていたという事実、あるいはコールリッジが1798年3月10日頃、即ち「老水夫の歌」が書き終わられる直前に兄の George Coleridge にあてた手紙では「ずっと変わらずに原罪を信じている」(2)と述べている事実、あるいは「カインの放浪」の代りにこの「老水夫の歌」が書かれたというコールリッジの告白(3)に加え、「祈りはしたが聞き入れられなかった」(4)カインの姿と老水夫が明らかに類似点を持っているということ、さらにコール

リッジがこの「老水夫の歌」執筆時に用いていたノートブックに‘*Wandering Jew/a romance*’(5)という記入があり、最近発見された *Table Talk* の未発表の原稿の断片——その中には「老水夫は私の心の中ではいつもさまよえるユダヤ人であった」というコールリッジの言葉がある——に基づいて、このロマンスが「老水夫の歌」になった、あるいは少なくともさまよえるユダヤ人はこの詩の語り手としての老水夫になったという Lowes の説をノートブックの編者 Coburn が確証したということ(6)、これらさまざまな証拠は〈罪〉が「老水夫の歌」制作のきっかけとして存在していたと考えさせるのに十分であるし、作品自体もこの見解をはっきり許容している。しかしコールリッジは「老水夫の歌」の中で単に〈罪〉のみを取りあげたわけではなく、彼の意図はむしろそれからの救済に向けられていたと考えられる。そしてここで〈祈り〉と〈喜び〉が大きな意味を持つようになるのである。

彼のノートブックには〈祈り〉についての次の記入がある。

Prayer—(7)

First Stage—the pressure of immediate calamities without earthy aidance makes us cry out to the Invisible—

Second Stage—the dreariness of visible things to a mind beginning to be contemplative—horrible Solitude.

Third Stage—Repentance & Regret—& self-inquietude.

4th stage—The celestial delectation that follows ardent prayer—

5th stage—self-annihilation—the Soul enters the Holy of Holies.—

この書き込みのある“*Gutch Notebook*”が用いられた時期は厳密にはわかっていないが、E. K. Chambersと Lowes は1795年から98年、また Coburn は1795年から1799年、あるいは遅くて1800年1月までと考えている。(8) コールリッジは1797年12月の末には「私は非国教派の牧師になることを決心しました」(9)と友人への手紙の中で述べ、又実際に翌年の一月には Shrewsbury で牧師として説教を行ったということを想起し、さ

老水夫の〈祈り〉と〈喜び〉

らに今問題になっている〈祈り〉の書き込み前後にやはり〈祈り〉について若干の同じ様な記入があり、それらが遅くとも1796年までに書かれているということを考えあわせると、コールリッジは確かに〈祈り〉という問題を重視しており、また上記の引用した〈祈り〉の書き込みもおそらくこの頃になされたのであろうという推測ができる。「老水夫の歌」が書き出されたのは1797年11月であるから、今この〈祈り〉の五段階について考えてみることはこの詩を理解する上でぜひ必要と思われる。

ところでこの五段階をよく注意してみると、これらの段階は老水夫の墮落から救済に至るまでの過程と奇妙に一致していることに気づく。この〈祈り〉の項目に着目して「老水夫の歌」との関連を指摘した人は私の知っている範囲で二人いる。一人は George Watson で、彼は単にその関連にふれたにすぎない。⁽¹⁰⁾もう一人は Malcolm Ware で Watson よりも6年早く1960年に気づいている。⁽¹¹⁾ Wareは*Review of English Studies*のNotes というたった2ページの中で、ある程度の対応個所を明示し、この詩は〈祈り〉に関する説話だろうかという疑問を提出した。しかし対応個所の明示といってもごく簡単で、また〈祈り〉の各段階に該当する作品の個所が私の考えているそれと異なるので、私は以下に、Wareの提出した疑問を解決する方向で議論をすすめ、〈祈り〉の各段階が老水夫の肉体上、精神上の変化とどの様に結びついていたかをよりはっきりと示さねばならない。

老水夫がアホウ鳥を撃った後、まず彼の乗った船は赤道上にくぎ付けにされる。水はいたる所にあっても飲み水がない為に船員達は喉の渇きで苦しむ。そして老水夫は他の船員達から非難され、のろわれて「叫ぶ」ことになる。

And every tongue, through utter drought,
Was withered at the root;
We could not speak, no more than if
We had been choked with soot.

Ah! well a-day! what evil looks
Had I from old and young! (12)

これが〈祈り〉の第一段階と考えられる。第二の段階は

Alone, alone, all, all alone,
Alone on a wide wide sea!
And never a saint took pity on
My soul in agony. (13)

に相当すると思われる。というのは老水夫はこの時点で自分の軽率な行為がもたらした結果を徐々に知り始めており、「数知れぬ、ぬるぬるとしたものが海上を這い、「腐った甲板」の光景や一人ずつ大きな音をたててくずれてゆく船員達の姿はまさに‘dreariness’と映り、その結果は老水夫のみが生き残って味わう‘horrible Solitude’に他ならない。そしてこの孤独が次の段階の‘Repentance & Regret’をもたらす。この第三の段階では老水夫の苦悶は絶頂に達し、最も心穏やかでない段階でもある。

But oh! more horrible than that
Is the curse in a dead man's eye! (14)

この様に老水夫の心中では〈祈り〉の三つの段階が経過する。しかし彼にはまだ次の第四の段階「熱烈な祈りのあとの天上の歓喜」に至る契機を与えられていない。

コールリッジが1798年5月14日友人のエスリンにあてた手紙では「自分の弱さを知っているのであなたにそつと言うのだが、私は常勤牧師になっていたらよかったと思う。というのは心をこめた祈りの後では、私は本当の喜び (Joy) を見いだすのですから」⁽¹⁵⁾と述べている。かつて彼はまた請願う〈祈り〉は精神の無能をあらわしていると考えたこともあったが、1797年にはこの考えを撤回している。その理由は「神に対して感謝だけでなく請願するふさわしさを確信した」⁽¹⁶⁾からであった。また De Quincey が伝えるところでは「祈るという行為は人間の心が可能な実に最も高度な

老水夫の〈祈り〉と〈喜び〉

エネルギーである。即ち祈りとは諸能力を完全に集中させたものである」(17)とコールリッジは語ったということである。

この様に〈祈り〉というのはコールリッジにとっては心を悩ませた大きな問題であり、それを実行するには内面の大きな力を必要とし、またそのような努力の後には上記の引用した手紙が示す通り〈喜び〉(Joy)が伴うということに注意せねばならない。H. House は *Coleridge* という本の中で「〈喜び〉という言葉はコールリッジが経験にあたって最も十全な、豊かな幸福を表現するキーワードである」(18)と強調している。

「老水夫の歌」の中ではこの〈喜び〉が〈祈り〉の第三段階から次の段階への移行を明らかにするのに有用と思われるので、ここでコールリッジ自身がこれまで〈喜び〉をどの様に捉えていたかを簡単にみておかねばならない。

コールリッジが15才の時に書いた“*Dura Navis*”という詩は若者が危険な荒海に乗り出すのを諫める教訓的な詩であるが、若い詩人は次の様に説得して無謀な企てを止めさせようとする。

Then with the joys of home contented rest—(19)

ここで用いられている‘joys’の意味は家庭生活から生じるさまざまな楽しみや慰安をさしていると考えられる。そしてコールリッジのこれ以後の詩では〈喜び〉がしばしば同じ様な意味を内包しているのである。‘On Receiving an Account that his Only Sister’s Death was Inevitable’ という19才の時のソネットでは次の引用が示す通り〈喜び〉が家族のメンバーと緊密に結びつけられている。

Say, is this hollow eye, this heartless pain,
Fated to rove thro’ Life’s wide cheerless plain—
Nor father, brother, sister meet its ken—
My woes, my joys unshared! (20)

このことは他のさまざまな詩に‘domestic joy’, ‘filial and maternal Joy’あるいは‘a little home of joy and rest’という言葉が多いとい

うことからわかる。後年彼は自己の想像力の喪失を嘆くオードを作ったが、その中で展開されている〈喜び〉の哲学は、象徴的には精神と外界との理想的調和の状態の時の気分と規定できるかもしれないが、〈喜び〉の根本はやはり家族とのつながりを抜きにしては考えられない。いい変えるところの言葉は自己と他者（特に家族）との〈連帯性〉を基本的に持っているということである。

そこでこのことを念頭において「老水夫の歌」に戻る。この詩では‘Joy’という語が詩行と並んで付けられた散文の注も含めて5回用いられている。そしてその一つは老水夫の〈罪〉からの救済が暗示される個所に見える。

In his loneliness and fixedness he yearneth towards the journeying Moon, and the stars that still sojourn, yet still move onward; and every where the blue sky belongs to them, and is their appointed rest, and their native country and their own natural homes, which they enter unannounced, as lords that are certainly expected and yet there is a silent joy at their arrival.(21)

この運行する月のイメージはこれまでに老水夫が体験してきた多くの忌わしいイメージとは全く異なっている。船員達ののろいを受け孤独に苦しみ、死ぬことさえできなかつた時に彼が見た単なる土の塊としての死者のイメージは星を伴った月の運行するイメージと対比される。「青空」は月と星にとっては「故国」であり「本来の家庭」でもある。そして星や月が自分の家に戻った時に「静かな喜び」で迎えられる主人にたとえられる。既に簡単にみたように〈喜び〉という語は自己と他者との〈連帯性〉という意味を基本的にもっていて、老水夫が月の運行を見て〈喜び〉で迎えらるる月を想像したということは彼の心の中で、アホウ鳥を撃ち落として以来断たれていた〈連帯性〉に向う変化が生じたと考えられる。これまでいつも外界の力に支配されてきた老水夫ではあったがここでやっと救済の契機を無意識ではあるが自覚しだしたと言える。

老水夫の〈祈り〉と〈喜び〉

詩行と並んで付けられた散文の注のなかにこの自覚の徴候を見い出すことは読みすぎだと考える人は上に引用した注が付けられている本文を読めば納得するに違いない。

Seven days, seven nights, I saw that curse,
And yet I could not die.

The moving Moon went up the sky,
And no where did abide:
Softly she was going up,
And a star or two beside— (22)

Tillyard は *Poetry and its Background* の中で救済の暗示という点に関して興味深い見解を提出している。その主旨を言うと ‘The moving Moon...’ のスタンザでリズムは弛緩していて、情緒的には老水夫の変化は既にやってきているのだが、文脈の上では老水夫の苦しみはまだ続くことを示している。つまりこの個所では「意味の二つの層」(two layers of meaning) が存在していると彼は言うのである。⁽²³⁾ この考えは十分説得力を持っている。‘Seven days’ と ‘seven nights’ のあとの休止、‘saw’ と ‘curse’ との長母音、[d] という歯基音の反復などによる単調でものういリズムはまさにこの捕われの老水夫の状況をよくあらわしている。しかし月がのぼると状況は一変する。‘moving Moon’ にみる頭韻、さらに ‘went’ と ‘up’ との、あるいは ‘did’ と ‘abide’ との間の一種のリエゾンによって急に軽快なリズムが生じる。そしてこの相対立するリズムは老水夫の心の変化を表現しているのである。というのは〈祈り〉の次の段階へ移行する時期が目前にせまっているからである。

月光のもとで老水夫は海蛇を見つけ「我知らず」祝福する。

The self-same moment I could pray;
And from my neck so free
The Albatross fell off, and sank
Like lead into the sea. (24)

そしてこれが〈祈り〉の第四段階——「熱烈な祈りの後の天上の歓喜」

の始まりである。老水夫が〈祈る〉ことができたのは天上の聖人が憐みをかけたからであり、聖母マリアからもこれ以後は「やさしき眠り」をもらうことになる。この意味で彼は確かに「祝福を受けた霊」であった。

次に奇妙なことが起こる。というのは船はその帆に風があたっていないのに急に帆走を始めるからである。そして死んでいた船員達も蘇り、船を操縦する。どんどん進んだ後、船は赤道上で一時止まりそしてその後急に大きく揺れて老水夫を卒倒させる。しかし彼が再び目覚めた時には、自分の故郷を目前に発見し「夢のような喜びよ」と叫びながら自己と社会との〈連帯性〉にまさに参入しようとする。

Oh! dream of joy! is this indeed
 The light-house top I see?
 Is this the hill? is this the kirk?
 Is this mine own countree? (25)

しかし「死中の生」を体験してきた老水夫にとっては自分の故国、自分が後にしてきた社会との〈連帯性〉をまだ十分に信じることができない。彼の苦しみはそれ程大きかったのである。この意味で彼がこれまでに経てきたさまざまな試練は次の〈祈り〉の第五段階——‘self-annihilation’——には不可欠の条件でもあり、物理的には彼の乗っていた船が故郷の湾内で突然沈んでしまうということで完了したと思われる。

ワーズワースが『抒情民謡集』の再版につけたノートの中で「老水夫の歌」に対する不平を漏らしたことはよく知られている。彼がこの詩の欠点と考えたまず第一のものは「主人公が、水夫という職業においてあるいは超自然の衝撃の支配下に長くいて、何か超自然的なものに与かってもおかしくはない一人の人間として、はっきりとした性格を持っていない」^⑧ということであった。この不満は逆の言い方をすると、老水夫が自己の Identity を喪失する程に性格を破壊されたということであろう。

ワーズワースの批評に対してラムは1800年1月の手紙で次の様に答えている。「私は老水夫がある性格と職業を持つべきであったというあなたの考えと全く違います。……悪夢の恐ろしい特異な一つの点は人格につい

老水夫の〈祈り〉と〈喜び〉

でのすべての意識がなくなるということであるが、老水夫は丁度悪夢をみている人の状態の様にあらゆる個性あるいは過去の自分の記憶を圧倒し、埋没させる試練を体験しているのだ。『四 ラムの方が老水夫の‘self-annihilation’を見ぬいていたという点でこの詩をより深く詠んでいたといえよう。

この様にアハウ鳥の射殺からさまざまな苦患を経てさらに神の作った卑しい海蛇にも共感をおぼえ祝福することで老水夫は最後に宇宙の大きな生命の中に同化する道を見出す。コールリッジは1802年9月に友人にあてた手紙で「自然は自らの関心を持っている。そしてすべてはそれ自らの生命を持っており、我々はみんな一つの生命 (one-Life) であるということ信じ、感じる人はその関心がどの様なものであるかわかるであろう」^⑧と述べている。この手紙で言及されている。‘one-Life’ という考えは1975年の「イオリアの 豎琴」の中で既に ‘the one-Life within us and abroad’ として明確に表現を与えられており、「深夜の霜」を経てこの「老水夫の歌」に通じるコールリッジの大きなテーマであった。彼が〈祈り〉の第五段階を書き込んだ時には老水夫の〈罪〉からの救済を経て、たとえ一時的ではあってもこの〈一つの生命〉に包括される老水夫の姿を意図していたことは疑いがない。というのは老人も若者も一団となって祈る時に始めて老水夫は「至聖所」(Holy of Holies) に入ることを許されるのである。あるいは少くともその場所のすばらしさは知っている。

O sweeter than the marriage-feast,
'Tis sweeter far to me,
To walk together to the kirk
With a goodly company!—

To walk together to the kirk,
And all together pray,
While each to his great Father bends,
Old men, and babes, and loving friends
And youths and maidens gay! (29)

しかし老水夫にはこの最後の場所は安住の場所ではない。彼は *Monk* に

みるさまよえるユダヤ人と同様に「夜の如く国から国へ」と旅を続けねばならないからである。老水夫が自己破壊を経て、一時的にしか〈祈り〉の第五の段階に留まることができない存在として捉えられているということからみれば〈祈り〉という問題は既にふれたようにコールリッジにとって確かに「頭を混乱させる程興味があり、またやっかいな題材」⁽³⁰⁾であったとも言えるであろう。

しかしコールリッジの詩の中で最も大きなテーマとして早くから存在した〈一つの生命〉という考えでは神は一貫して〈愛〉として捉えられており、自己の体験を語り続けねばならない老水夫にも最後には安息が訪れることが予想されるのである。⁽³¹⁾

この様に〈祈り〉と〈喜び〉を通して「老水夫の歌」を考察すると、我々が最初にふれたコールリッジ自身の意図に注意を払わない読み方がいかに我々を納得させないものであるかがわかる。「老水夫の歌」は〈祈り〉の各段階を体験した老水夫の「内なる本性」(inward nature)⁽³²⁾を劇的に描いており、超自然の事件を用いて一見不可解で奇妙と思われるものの中に真実を明らかにした詩であった。そしてこれこそがコールリッジの目的であったのであり、この目的を抜きにしては「老水夫の歌」は論じることができない。

注

- (1) *The Letters of Charles Lamb*, ed. E. V. Lucas, 3 vols. (New York, 1968), I : 95.
- (2) *Collected Letters of Samuel Taylor Coleridge*, ed. E. L. Griggs, 6vols. (Oxford, 1956), I : 396.
- (3) *The Complete Poetical Works of Samuel Taylor Coleridge*, ed. E. H. Coleridge, 2vols. (Oxford, 1912), I : 287.
- (4) *Ibid.*, I : 292.
- (5) *The Notebooks of Samuel Taylor Coleridge*, ed. Kathleen H. Coburn, 5vols. (New York, 1957-), I : 45 G.37.
- (6) Note to the notebook entry 45 G. 37.

老水夫の〈祈り〉と〈喜び〉

- (7) *Notebooks*, I : 257 G.254.
- (8) General notes on each notebook, xix.
- (9) Letter to John Prior Estlin, December 30, 1797, *Collected Letters*, I : 362.
- (10) *Coleridge the Poet* (London, 1966), pp. 97-98.
- (11) “*The Rime of The Ancient Mariner: A Discourse on Prayer?*” in *The Review of English Studies*, 43(1960): 303-304.
- (12) *Poetical Works*, I:191, 11. 135-140.
- (13) *Ibid.*, I : 196, 11. 232-235.
- (14) *Ibid.*, I : 197, 11. 259-260.
- (15) “Conscious of frailty I almost wish (I say it confidentially to you) that I had become a stated Minister: for indeed I find true *Joy* after a sincere *prayer*; ...” *Collected Letters*, I : 407.
(イタリックスは筆者、以下何も断わりがない場合本文のイタリックスは筆者がほどこしたものである)
- (16) *Poetical works*, I : 79, note 1.
- (17) Quoted by G. Watson, in *Coleridge the Poet*, p. 98.
- (18) Humphry House, *Coleridge : The Clark Lectures 1951-52* (London, 1953), p. 102.
- (19) *Poetical Works*, I : 4, 1. 58.
- (20) *Ibid.*, I : 20. (21) *Ibid.*, I : 197.
- (22) *Loc. cit.*, 11. 261-266.
- (23) E. M. W. Tillyard (London, 1970), pp. 73-74.
- (24) *Poetical Works*, I : 198, 11. 288-291.
- (25) *Ibid.*, I : 204, 11. 464-467.
- (26) Quoted by R. L. Brett and A. R. Jones, in *Lyrical Ballads* (London, 1968), pp. 276-277.
- (27) *The Letters of Charles Lamb*, I : 240.
- (28) Letter to William Sotheby, September 10, 1802, *Collected Letters*, II : 864.
- (29) *Poetical Works*, I : 208, 11. 601-609.
- (30) Note to the notebook entry 750 5 $\frac{1}{2}$.6.
- (31) cf. 「神の統治をいつも信じてきたので私は熱烈な楽道家であった」1834年6月23日

の *Table Talk* 中の言葉。

③) *Biographia Literaria*, ed. J. Shawcross, 2vols. (London, 1967), II : 6.

付記：本稿は阪大英文学会第7回大会(昭和49年11月10日)で口頭発表したものに
加筆修正したものである。